わたしの原風景 13

内田麟太郎
うちだ　りんたろう／絵詞作家

イラスト／石川えりこ

私は炭坑の町、福岡県大牟田市に生まれた。遊郭が町の南北にあり、映画館は十指を超え、ヤのつく方もすこぶるお元気であった。

ばあちゃん子だった私は、飲食街近くの祖母を訪ねるのだが、女達が髪をつかみ合って喧嘩をしていた。男を取ったどうのこうのというのを、小学生が度々観賞していたことになる。

そんな町であったから、川は化学薬品の臭いに満ち、さすがにタフなザリガニも転居せざるをえなかった。転居先は蓮根池で、ウシガエルの横で、まっ赤な鋏（はさみ）をふりかぶっている。ザリガニの釣り餌はカエルだ。私は捕まえたカエルを地べたにたたきつけ、皮をはぐ。残酷といえば残酷だが、私のいのちは充実していただろう。それなのに、ときどき、ぽつんと釣りをしている自分を見つめている自分がいた。（おれは、なぜここにいるのかなあ）。わからなかった。

家から二十分ほど歩いたところに、延命公園があった。公園は丘陵で小さな延命動物園もあり、セミ捕りによく通った。

生まれたてのヤマカガシ（蛇）を懐に入れ公園で遊ぶ。あったかいのか蛇はじっとしていた。帰りにそっと地面へ放してあげる。

貝の化石（当時は貝塚と思い込んでいた）も道ばたに露出していて、通るたびに足が止まった。モース教授の気分だったのだろう。

小さかった動物園も、いまでは西日本一の敷地を誇る大牟田市動物園に変わり、来春には、園内に『おれたち、ともだち！』絵本シリーズ原画常設展示の絵本美術館が開館する。

ソフトクリームをなめながらゴンドラに乗る。わが町が見える。

デパートで万引きしたのも、この町である。

家出をくり返していたのも、この町である。

炭坑は閉山したが、その実の匂いをいつもかいでいた楠木は、いまも公園内にある。

猥雑（わいざつ）な町だった。でも、だからこそ私はこの町を好きなのだ、と思う。町は私に〈雑々（ぞうぞう）の思想〉を持てと教えてくれたのだから。